



発行所
 社団法人 国民文化研究会
 (九州←→東京←→全国)
 東京都渋谷区東1-13-1-402
 振替 00170-1-60507
 電話 03-5468-6230
 F A X 03-5468-1470

月刊「国民同胞」編集部
 毎月一回10日発行
 購読料 年間2000円

「祖国を守るとはわれわれの明日を守ることだ」

— あらためて「戦後レジームからの脱却」を問ふ —

本会理事長 上村和男

今次の参院選で、安倍晋三総理が掲げる「戦後レジームからの脱却」が争点となれば、国家は如何にあるべきかが国民に広く問はれ、国民の間に国家意識が覚醒する契機となったことと思ふ。国家が大切であることにもっと関心が向けられたであらう。しかし、選挙戦の終盤になって、さうはならなかった。国政選挙であるからには、「中国の核ミサイル」や「核武装化する北朝鮮」のことも関心が向けられて当然であった。

旧社会党系(民主党の一部)の自治労が横車を押してつくり上げた「悪しき労働慣行」の結果でもあったはずだ。むしろ現内閣は、その後始末をしようとしてゐるのに、野党は自らの責任を棚上げにして不安を煽った。「戦後レジームからの脱却」こそ、国政選挙にふさはしいテーマのはずである。憲法をどうするのか、教育はどうあるべきなのか。国家の未来について堂々と政党間で論争してこそ、国民の国家への関心も高まり、占領政策の中で何を喪失したかに気づくことに繋がったと思ふ。

戦後は、「個人の尊厳」と「自由・平等」が一人歩きして共同体意識が稀薄化したところに、さらにグローバリゼーションといふ名の市場原理主義が入り込んだ。そして国家を悪

と決めつけ、国民の精神的支柱が国家にあることを忘れてしまったのが戦後の思潮であった。拉致問題を見ればわかるやうに、国家がしっかりしなければ国民を守ることができない。北朝鮮の蛮行に対するこれまでの外務省のいい加減な姿勢、それを見逃してきた多くのマスコミ。どこに日本人としての国家意識があったと言へるのだろうか。

佐伯啓思京都大学教授は『国家についての考察』(飛鳥新社)の中で次のやうに記してゐる。

「戦後の民主主義は反国家主義を標榜したため民主政治を支えるものとしての国家の存在を見失った。個人の背後に共同社会や集団が、自由の背後に規律が存在しなければならぬことを見落した。平和の背後には力がなければならぬことは切り捨てられた」

占領政策が、日本人に国家意識を喪失させることで、その精神的支柱を絶ち切って日本を弱体化させる意図的な作業であったことは明瞭である。このことに鑑み「戦後レジームからの脱却」には、佐伯教授が指摘する「見失ったもの」「切り捨てられたもの」を再生させて、祖先が生命に代へて守り伝えてきた「祖国」

を真摯に顧みることを出発点としなければならぬ。

「われわれの国が存在しつづける未来は、望ましいものに思われる。だからこそわれわれは、国の防衛にみずからを動員するのであって、何も血のためでも、言語のためでも共通の過去のためでもない。祖国を守ることによつて、われわれの明日を守るのであって、われわれの昨日を守るのではない」

右はスペインの哲学者ホセ・オルテガ・イ・ガセー著『大衆の反逆』からのものである。国家の意味を問ふ名言だと思ふ。この一節をよむと、莞爾として敬礼し出撃して行つた若き特攻隊員の姿が臉に浮ぶ。まさしく、祖国の明日を信じて死地に赴いたのである。そこに若者の生きてゐるといふ喜びと主体性が感じられて私の胸は熱くなる。

自らを生み育ててくれた共同体とわが生命が繋がつてゐると実感した若者に凜とした主体性が漲る。澁刺とした若者の胸中に、日本人の「美しい心」が甦り、それが広く浸透して世界の人々を必ずや幸せにする。そのためにも、国家不信を植ゑつけた占領政策の呪縛から一刻も早く脱け出さうではないか。(七月二十三日)